

先輩から



実学のInput、そしてOutput

加藤 佑紀 (2022 博 理工学研究科)

私は今、日本ペイントホールディングス株式会社に所属し、重機や電車といった大型重車両用塗料の研究開発職に就いています。“研究開発”という職の探求心に駆られ、毎日を楽しんでいることは本当に有難いことです。こうして日々の研究開発職に耽溺している根底には、関西大学での学びがあることは言うまでもありません。この度、この様な貴重な機会をお借りし、研究室生活を簡単に振り返り、どう“今”に繋がっているのか改めて考えたいと思います。

私は2018年に関西大学エネルギー環境工学科(現 エネルギー環境・化学工学科)を卒業し、関西大学大学院理工学研究科環境都市工学専攻に進みました。山本秀樹先生の研究室に所属しHansen溶解度パラメータという物質の表面物性に関する研究に勤めました。山本先生は多種多様な分野の企業や海外大学との共同研究をされており、配属当初から研究の最先端に触れることができました。先生・企業の方々との熱いディスカッションに無我夢中で喰らいつき、「研究とは何か」「報告の仕方」といった研究の基礎から、「コスト」や「研究への投資価値」といった社会/企業での考え方も多く習得できました。研究成果が企業のプラントに実際に活かされた際の喜びは一入であり、今でも鮮明な感動として脳裏に刻まれています。また、修士ではオーストリアのウィーン医科大学へ3度赴き、血液の表面物性に関する研究を行いました。医学という異分野との共同研究は、私の固定概念を打ち砕くとともに、英語での研究発表・ディスカッションの難しさなどの悔しさを味わいました。

研究室での経験により、知識や仮説検証の方法、報告といった基礎部分のInputだけでなく、“社会/企業は何を求め、自分の研究価値は見合っているのか”というOutputする力を会得できた結果、私の研究に対する取り組み方が定着し、視野が広がったのは言うまでもありません。「自ら研究計画を立案し、結果について考察を行い、先生とディスカッションを経て前に進

む」。そういった研究に対する面白さ・奥深さを知ることでもできました。

つまり、関西大学の掲げる理念“実学”を身をもって経験できたと、社会人になった今、改めて実感しています。

日本ペイントホールディングス株式会社に入社し社会人4年目となりますが、研究開発という職は決して平坦ではなく、まさにオフロードです。仮説に反する予期せぬ結果が出ることもあります。その際は、もちろん落胆/苦悩もしますが、絡まった糸を解くように“何故?”を追求する力、そして糸を再び綺麗に結ぶ“価値”があるのかを判断する力は、“実学”の賜物だと思います。そうして、着実に業務を行う中でHansen溶解度パラメータの知識は、当時の上司に重宝していただき、1年目にして全社発表という大役に抜擢頂くこともできました。

“研究”には決まった道筋がありません。だからこそ、楽しさと苦難が乱立しています。研究室時代のしっかりとした“実学”のInputとOutputがあるからこそ自分の基礎が整い、“研究開発”という道を突き進んでいるのだと確信しています。

余談ですが、「仕事を楽しいと一番実感する瞬間はいつですか?」と問われると、「休日の移動時間」と答えます。休日に仕事とはアンマッチにも程がある!と思われるかもしれませんが、自分が関わっている塗料が塗装された大型重車両を街で目にする、「今日も元気に頑張ってるな〜」と社会に携われている/役立っていることを自分の目で感じる事ができるからです。こうして“研究開発”に楽しさを感じ、没頭できているのは関西大学で過ごした研究室生活があってこそであり、ご指導ご鞭撻を承りました山本先生には感謝の念が絶えません。

今後も、山本先生の研究室で学んだ経験のもと、関西大学の名に恥じぬよう、“実学”を通して培った力を目一杯発揮し、挑戦し続けていきます。